

言葉の温度

旭中学校3年
小森 琴葉

「1万8870件」これはなんの数字か分かるだろうか。

私は中学一年生のとき、総合の授業でSNSによるいじめで自殺した女子中学生の話聞いた。そのいじめはLINEによるいじめだった。LINEグループで少しの時間、未読になっていた女子中学生は、その少しの時間がターゲットとなった。いじめのきっかけを作った人だけでなく、次から次へとグループのメンバーが加わり、その女子中学生を追いつめることとなった。

私はこの話を聞いたとき、身近に感じることができず、自分に起きるはずがないと思っていた。

中二の春、体育の課題のためにグループLINEを作った。こなすためにはどうしたらいいか考え、動画を作成し、グループLINEに投稿した。

すると、自分が名指しされ、否定された一文がLINEの画面に映し出された。その瞬間、私の胸はギュウと苦しくなり、涙がポロポロと流れ落ちていった。

「どうすればいいんだろう…。」ずっと悩んでいた。私はみんなのためにがんばったつもりだったけど、みんなとの温度差があった。課題をこなすために、みんなの意見を聞いても反応がなかった。だから自分の意見をLINEに投稿した。その結果、あの言葉が送られてきた。

私は母に今回のことを相談した。母は私の話を聞いてくれ、「走りすぎないようにまわりもよく見るようにするといいよ。」というアドバイスをもらった。一人で抱えこんでいたときよりも楽になった。

会話の流れが速く、ささいなことでも誤解や行き違いが起きやすいグループトーク。どんなことに注意したらよいだろうか。

①相手に誤解を与えないために、記号やスタンプ、顔文字を活用して、気持ちが正しく

伝わるよう工夫する。

②グループトークはテンポが速く、複数の会話が平行して飛び交う。話の途中で参加すると流れをつかむのが大変であるため、曖昧なままやりとりをせず「見直す」ことを習慣にする。

③どんな相手でも嫌な気持ちになることがある。そんなときは、感情をすぐにぶつけずに一呼吸して考える。

④文字だとけんかになりそうなら、電話で話してみる。

自分の意見を押し付ける、空気に流され本心ではない意見に同調する、ということをしていない心がけと、お互いに相手を思いやる気持ちが大切である。

SNSによるトラブルは、年々増加している。まわりを見ていても、待ち時間にもスマホ、ごはんを食べるときもスマホを手にかけている人がほとんどである。

そもそも私達がコミュニケーションツールとして、SNSに依存してしまっていることに対して、一度立ち止まって考えてみる必要があるのではないだろうか。本来言葉には温度というものがあり、実際に会話を交わすことで、表情も加わり、相手の気持ちや考えが自然と伝わってくるものだ。それはLINEのトーク画面上では決して感じることでできないものであり、私達人間にだけ与えられた「言葉」というものの本当の力がそこにはあるのではないだろうか。

SNSによるトラブルの原因は、コロナ禍ということもあり、家族とのコミュニケーションをとることも減っている。そして、SNSで気持ちを伝えるときの伝え方がわからない人が多くなった。SNSでは「うざい」「死ね」「生きている意味ある？」などの言葉を簡単に使っている若者が多い。私達は生まれたときからパソコンやスマホがあり、便利だが人と関わる時間が少なくなっている。

だから簡単にそのような言葉を使ってしま
うのではないだろうか。

「1万8870件」この数字は、令和二年度の
パソコンや携帯電話を使った、SNSによる
いじめの件数である。小学生、7407件。中学
生8662件。高校生、2598件。特別支援、203
件。中学生が最も多い件数である。

SNSは使い方を工夫すれば、とても便利
なものである。しかし、使い方を間違えれば
一瞬で言葉の凶器になることもある。だから
こそ情報の社会に生きている私達は、意識し
て気をつけていかなければならない。

「自分には絶対起こらない。」と思ってい
る人がほとんどだと思う。だが実際に、SN
Sによるトラブルはたくさん起きているの
だ。私は自分の経験を通して、SNSでのト
ラブルは他人事ではないこと、言葉の伝え方
を意識しないと簡単に人を傷つけてしまう
ことを知ることができた。SNSでは相手の
顔が見えない。普段、会話するときよりもコ
ミュニケーションが難しい。このことをふま
え、私達はSNSに向き合っていかなければ
ならないのだ。

本来言葉には温度というものがあるので、
一度立ち止まってSNSについて考えてい
くことが、便利な機能を利用する私達のマナ
ーである。